

接待のかたちと心 —実践者の立場から— The Form and Spirit of *Settai*: From the Standpoint of a Pilgrim

賴 富 本 宏 (種智院大学前学長・教授)
Yoritomi Motohiro (Former President and Professor, Shuchiin University)

My presentation today will be based on my own experience of the Shikoku pilgrimage made as a temple priest along with other believers. The *settai* (hospitality) we received took three forms — individual, village, and long-distance *settai*. The content varied, including the offer of material items, free lodging (*zenkon yado*), and the offer of labor. *Settai* has been carried out since the Edo period and has been described in detail in literary works such as the *Kane no waraji* (Iron Sandals) by the popular writer Juppensha Ikku. This type of *settai*, while fading, still exists today.

One aspect of the spirit of *settai*, in other words, the motivation and aim of providing *settai*, is a feeling of sympathy for the pilgrims. A second is the acquisition of merit through providing *settai* (*sazen*) founded on a belief in Kōbō Daishi. A third is a desire for peace in the afterworld for ancestors and the dead (*tsuizen kuyō*). A fourth is the act of giving, in itself meaningful (*fusegyō*), and the idea of receiving happiness from doing good to another (*fukuden shisō*).

1、本論の前に

実践者の立場からの四国遍路

皆さんこんにちは。ただいま御紹介をいただいた賴富でございます。内田先生、また学長・学部長先生のお話にございましたように、こちらの愛媛大学さんでは、非常に時機を得たと申しますか、「四国遍路と世界の巡礼」というタイトルで何度か研究集会等をなさっておられます。私とこの研究会との御縁というのは、数年前に報告書を送っていただき、それを拝見させていただきまして、素晴らしい研究会だと思いました。とくに四国の伊予の愛媛大学で色々な英知を持った方々が集まられ、遍路あるいは世界の巡礼ということを多角的に、広くかつ深くご検討されているということに感銘を受けたわけです。私は四国の香川県出身で、よくいえば非常に積極的、悪く言えば少し厚かましい人間でございますので、ある日突然内田先生にお会いし、色々お教えいただくとともに、その後機会を得まして、何度か研究会に聴衆として参加させていただいて色々教えてもらったことがあったわけです。ただ、私はいわゆる学者としては四国遍路の捉え方を歴史学の立場に関心を持っているとともに、個人的には、真言宗の寺の住職で、四国遍路の中に実際に身を置いてから40年になります。したがって、今日のお話は、文献に書いてあること、あるいは史料から論ずるというよりも、実践者の立場からもう一度四国遍路についていろいろ経験したことをお話しさせていただきたいと思ったわけでございます。

私は、大学時代から、その後就職してからも外国の仏教、特にインド・チベット仏教の勉強をし、学位も取らせていただきました。特に密教といわれるものに関して非常によい御縁をいただきまして、その故郷であるインドと、それから故郷と言うよりもむしろ兄弟の国、なぜかというとチベットの仏教というのは日本に伝わった仏教よりは後から発達したものなのですが、そういう仏教あるいは密教が生きている所へフィールドワークに行く機会を仏像研究の先生から与えていただきました。その結果、非常にありがたいことに、インドで今までなかったといわれる大日如来像とか不動明王像、そして如意輪などの観音像、そういう日本の仏教・密教の起源になるような仏像を発見、紹介することができました。それが学者としての私の一つの業績ということになっているそうです。そうしたやり方で見つかった仏像を色々調べ、それがどういう經典などに説かれているかということを文献と照合させていただきました。それによって、その頃の仏教・密教はどういう形を取っていたのか、そして密教の場合は特に曼荼羅というものを復原させていただいたわけです。曼荼羅については今でも研究を続けていますが、そちらの方ではテレビにも何度か出させていただいたこともあります。その曼荼羅をとらえる場合には、どちらかというと仏教の歴史・密教の歴史という視点からとらえさせていただきました。

その後も色々な御縁がございまして、その番組を見ていただいた、もうお亡くなりになりましたが、前の文化庁長官の河合隼雄先生という方がいらっしゃいました。河合先生は精神分析、深層心理学の立場から曼荼羅と

いうものに非常に関心を持っておられました。私は真言宗系の種智院大学というところへ大学院を出てすぐ奉職しましたが、河合先生の目に留まりまして、過去の遺物としての曼荼羅ではなく、それが現在の我々の心に生き、あるいは仏の姿として生き、今を生きる人びとの心なり、あるいは全体の人間に何か影響を与えないだろうか、それを研究して欲しいということで、4年間だけ河合先生が所長をされておられました国際日本文化研究センター（日文研）というところに奉職させていただきました。そうすると、色々ありがとうございますが、もともと私の専攻はインド・チベットという仏教・密教の故郷でしたが、その勤務先は、国際という字は付いていますが、その下に日本文化という言葉が付いています。そうするとインド・チベットのことばかり研究するわけにはいかないということをございまして、遍路・巡礼の研究者である白木君という方が私の教え子におおりましたので、彼を日文研の研究員として採用しました。私もこれまで遍路行の実践はしていましたが、2人でもう一度学問として、遍路を中心とした一つの文化体系として、色々な視野から研究したらどうかということになりました。非常にお恥ずかしいお話ながら、四国遍路、その後NHKからの依頼もございまして西国（西国巡礼）の番組作りの方も手伝わさせていただきましたけれども、そういう遍路・巡礼の研究者ということになったのはまだ10数年前でございます。そういう者が今ここで皆さんのお役に立てるお話ができるかどうかは非常に心許なく思っております。

最近四国遍路の主に成立と展開に関する本を出しましたけれども、この中で先学の方々の研究成果を大いに参考にさせていただきました。私といたしましては、四国に生まれ、そして後でお話申しますが、この頗富と言う姓はちょっと独特の姓でございまして、四国出身、特に香川出身の方がいらっしゃるとすぐに思い出していただける変わった姓でございます。こういう四国出身者として、そして今申し上げました実践者、あるいは体験者として接待というものにはかねがね色々と感銘を受けておりました。これは宗教者としても、NHKの「心の時代」の中でも何度かしゃべらせていただきましたが、この接待ということを通して全く人間が変わったという方もいらっしゃいます。ご存じの方はそんなものという形でお気づきかと思います。また、接待のかたちには歴史的な変遷もありますし、主体が個人か団体か、かなり制度化したものかどうかなど、いろいろな捉え方がございますが、接待の持つかたちを私がある程度把握して、調べている範囲でまず申し上げ、そしてその心というか、それをもたらしたものは何かということをお話させていただきます。接待によって一緒に行つた方が全く人格が変わったというのは、あくまで特殊例かと思いますが、私も宗教者の端くれですので、いわゆる接待の心というものを、仏の心とまではいきませんけれども、人間の素直な心がなぜ生み出されたのかということを、試論ではございますが、ここで少しお話をさせていただきたいということで今日こちらに立たせていただいたわけです。

中国・韓国の佛教界と巡礼

私がこの巡礼・遍路の研究を始めて10年余りになるのですが、色々な御縁がございまして、今年になって3回、詳しくは中国から2回、韓国から1回ご招待がありました。ほとんどが学会ですが、なぜ私が呼ばれたのかをこちらから聞いたところ、現在中国の佛教や韓国の佛教はちょっと停滞気味で、少しでも前向きの明日を生きるエネルギー・力を得たい、とのことでした。全く別の話ですが、一昨日とその前日に神戸の真言宗連合会の毎年のバス旅行があり、今年は企画した若いお坊さんたちがパワースポットというところを選びました。私も少し古いタイプの人間ですから、パワースポットというものを知りませんでした。ただかつて日文研で「聖なるものの形と場」という共同研究を立ち上げた時、形と場というものはすでにポイントにあげましたから、いわゆる聖地がどういう属性や性格を持った所かという議論はかつてやりました。パワースポットというものが、若い人に今すごい人気だそうですが、これはかつての同僚の小松和彦先生や私もそんなに高くは評価していないのですが、人が関心を持つということは決して悪いことではないと思います。もちろん、マスコミの事情とか政治的な事情もございましょうが、結果的には熊野三山をはじめ、和歌山県と奈良県のパワースポットに連れて行かれたわけです。

元の話に戻りますが、今年非常に短期間の間に3度も東アジアの国々、特に中国の佛教協会・佛教学会から、そこから巡礼・遍路の話をして欲しい、そのノウハウを聞きたい、と言われました。中国の五台山の映像が出ておりますが（図2）、今年先に峨眉山から招待を受け、それから8月の終わりには五台山から招待を受けました。私は中国佛教を密教研究の一環として色々論文を書いていますから、始めから無関係というわけではありません。ただ中国の今の立場からすると、何故関心が持たれるのかというと、一つには中国が最近国力を増



接待のかたちと心

—実践者の立場から—

頼富 本宏
(種智院大学前学長・教授)

本論の前に

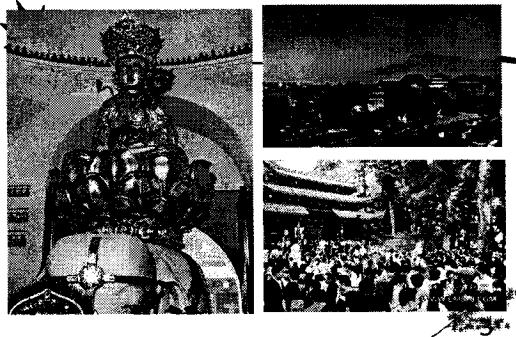
・日本の遍路・巡礼に向けられる熱い視線

中国

五台山・峨眉山など、個々霊山のみの巡礼しかないため、複数靈場を巡る巡礼・遍路を取り入れることで、中国仏教を活性化けようとする試み



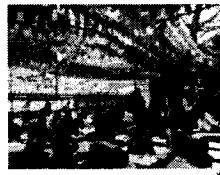
大きさせてきましたことがあります。そして、今から10数年前の鄧小平さんの時代に改革開放という政策に変わりました。よくいえば精神の自由化ということになるのですが、かつての中国仏教というのは、どちらかというと信者さんがお寺にお参りに来て、拝むことによって成り立っていたといえます。それをより活性化させ、たくさんの方々にお寺に来ていただきたい、さらには、中国政府の方針としては、観光・レジャーだけではなくて、寺院の空間を教育と福祉に使いたいという意図もあることを高官の方からお聞きいたしました。遍路・巡礼が関心を持たれたのは、そういうシステムというか、複数靈場に入びとが動くということは、かつて日本では遠隔地参詣という形でスタートしたと思います。要するに人の流れというものを寺院を拠点に集めたいわけです。それにはどうすればいいかということで、まず峨眉山に参りました。普賢菩薩の峨眉山は中国の四大聖地の一つで、他には文殊菩薩の五台山、観音菩薩の普陀山、地藏菩薩の九華山があります。そのうちの二つ、結果的には文殊さんと普賢さんという仏さんの靈山に行ったのですが、その中だけの巡礼というのは昔からありました。今でも残っております。特に五台山の場合は、日本からも平安時代の円仁をはじめとしてたくさんの方が参られたことはよく知られています。その五台山の仏教、あるいは仏教文化を日本に移したものも、高知県の竹林寺をはじめとして各地に残っています。



本論の前に

韓国

複数靈場を巡る習慣がなく、しかも檀那寺・檀家の制度もない。曹溪宗の個人の僧侶が中心となって、「百八か寺巡礼」を立ち上げ中



率直に言って企業政策みたいなのですが、たとえば四川省なら四川省で巡礼靈場を作りたいということです。ならば、どういうお寺を選ぶのか、それにはどういうハード面での整備が必要なのかという意見を聞きたいということで、3月と8月に寄せていただいたわけです。よくいえば非常に積極的、悪くいえばかなり企業政策的なところもございますけれども、行政が非常に力を入れているというのは事実だと思います。この大きい方の写真は峨眉山の山頂にありますお寺の普賢菩薩像ということでございます(図3)。私もう一つの専門は仏像研究でございまして、曼茶羅からスタートしましたが、仏像研究も一応やっております。NHKの「夢の美術館」で仏像100選を紹介させていただきましたが、普賢さんは法華経や華厳経に出てくる菩薩さんです。中国は尊格的にうまく割り振りをいたしまして、靈山というものを人工的に作ったのです。五台山は自然発生的にできたのですが、あとは、たとえばこの峨眉山には普賢さんを置いています。そして中国政府が裏から支援しているというのは、非常に言いにくい話ですが、国費を直接的にお寺の経営には使えないのです。毛沢東さんの思想に反しますから。ところが鄧小平さんはいわゆる資本主義を導入いたしまして、その後投資ということで色々な会社を作られました。その一つに宗教関係の投資会社というのがあります。そこにお金を出して、その中から、中国で靈場化あるいは巡礼の複数化ができるところに、つまりハード面の投資をしています。たとえば、これは峨眉山の山の下ですけれども、大佛禪寺という全く新しいお寺です(図3)。お寺です

から、ここに本堂にあたる大雄宝殿や色々な仏を祀る堂を建てました。そして、先ほど申しましたように、寺という空間に福祉と教育、特に福祉の要素を持たせるという趣旨がありますから、中に福祉施設がかなりございます。これには何十億単位の資金援助をされていると聞きました。そして、現に精神的にも自由化されたと一応考えていいと思うのが、この右下の写真です（図3）。ここには日曜などになりますと、日本の信仰心といふものとは少し違うかもしれません、若い夫婦が赤ちゃんを連れて来ています。他にあまりメジャーな観光地はないので、お寺参りというよりは、そこへ行ってピクニックするというような形です。ただ、私は仏教者として少し安心しました。そこは全くレジャーとしてだけの宗教施設かというと、そうでもなくて、やはり中国独特の長い線香を持って、そして何万の人が土日には峨眉山に集まっているということには、いささか感激したわけです。

少し趣旨が違いましたが、韓国にも呼ばれました。現在の宗教状況の話になりますけれども、中国の場合は今まであまり宗教や文化を、抑圧といってはちょっと語弊がございますが、あまり推進はしていませんでした。ところが、韓国は必ずしもそうではないのです。向こうの方がはつきり言われたことですが、朝鮮戦争以後キリスト教がたくさん入ってきて、人びとの宗教分布というものがかなり変化し、特に韓國のお寺には人が来ないそうです。その理由は、図4に書いておりますように、韓国には日本の徳川時代の檀家制度のようなものはございません。従いまして、何かの法事の時にはお寺へ行って拝んでもらうことはあるのですが、寺参りというのがどうしても少ないのです。そこで、これを今推進されている方は、日本へ来られまして、四国八十八か所、それから西国の大な札所を、ご自分でお弟子さんを連れて巡られました。そして、たくさん人が来ているな、というようなことで、新しく百八靈場というものを立ち上げておられます。これは、西国や四国のように中心となる仏あるいは弘法大師という聖なるものを固定化するのではなく、お寺が聖なるものだから、とにかくそこへ行くというような習慣、システムを作りたいというところからスタートしたようです。ご案内のように、百八というのは煩惱の数といわれているもので、数珠の数でもございます。ですから、これは日本の新しい集合靈場作りでも、まねをしました。では、どのようにして人を集めのかというと、一か寺回ると数珠の玉を一ついただけるのです。二か寺行くと二つで、全部お参りすると、百八の数珠が完成するのです。こうして人びとの宗教離れ、仏教離れをできるだけ食い止めようとしています。それを学問的にやりたいということで、韓国の仏教学会主催で今年の3月に巡礼をテーマに国際学会がございました。インドの巡礼の研究者、アメリカで今巡礼学を教えている韓国人の方、ヨーロッパで巡礼研究をやっている方、そして日本からは私が参りました。そういうように、目的がはっきりしています。かなりリアルな目的で、巡礼のシステムというものを立ち上げたいというのが本音でございます。ただそこには、やはり人びとは巡礼や遍路に関心があり、そして関心だけで終わらせずに実行、行為で示すということがあります。巡礼や遍路には人びとをここまで引き付けるものがあるということに注目しているのは事実と思います。

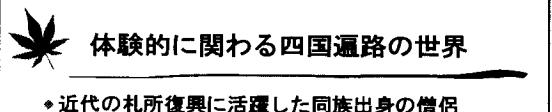
この他、一週間前にインド、スリランカ、それからミャンマーの方々とアジアの仏教文化に関する国際学会をやりました。そこでは巡礼の話は出なかったのですが、少なくとも東アジアでは巡礼に関して注目が集まっているということを最初に申し上げておきたいと思います。

2、接待のかたち

体験的に関わる四国遍路の世界

さて、時間があまりございませんので、本論に入らせていただきますが、私が遍路や巡礼の研究に入ってから間もないということを率直に申し上げました。ですから、まだまだ理解が不十分なところもございますけれども、それを学問的に捉える前に、実は個人的、体験的に四国遍路に深く関わっていたということをまずお話をさせていただきます。そしてそれを少し整理しながら、次に接待の話に移ります。

まず最初は、近代の札所復興に活躍した同族出身の僧侶がいたことです。四国遍路の始まりは、奈良時代末から平安時代のいわゆる辺地修行とするのが今の大体の考え方です。そういう行者中心の四国遍路が、ある時からだんだんと誰でも



体験的に関わる四国遍路の世界

- ◆近代の札所復興に活躍した同族出身の僧侶
- ◆先代住職による比較的初期のバス遍路の開始
- ◆50年以上続く団参遍路
- ◆札所寺院の子弟教育
- ◆美術展の企画・協力



行ける四国遍路という形になって行くわけです。しかし、ご案内のように、明治の神仏分離等もございました、一度四国遍路は明治の初期に落ち込みます。それから第二次大戦の頃も少し落ち込みます。宗教文化というのはやはり平和であることが必ず前提ということがいえると思います。その明治の最初の落ち込みの時、いわゆる神仏分離によって仏教全体から神社等が切り離されました。そうすると、何百年も続いた両方をお祀りするという日本の宗教風土がかなり変わってきます。四国遍路も江戸時代にかなり盛況になったのですが、それが明治以後しばらく霞んでしまったという時代がございます。その頃、この落ち込んだ仏教というものを、もう一度活性化しようとして活躍された方はたくさんいらっしゃいます。いちいちご紹介できませんが、1人や2人ではございません。その中に、たまたま私と同じ頼富姓の者が1名おりました。彼は何をしたかというと、要するに遍路のハード面を復興したのです。お寺が非常に荒れてしましましたから。遍路というのは点が中心ですけれども、それを線でつないでいますので、どちらも大事です。ところが、点がかなりしょぼくれてしまつたので、その八十八か所の中で重要な寺を、経済的復興、最近はやりの伽藍復興をしたのです。中国に行った時、峨眉山の仏教会が建物にお金をかけるのは発想としては古いと少し言つたのですけれども、全然聞いてくれませんでした。やはり、何億というお金をかけて色々なお堂を建てることが仏教の復興だという考えがまだ強いようです。けれども、実際には何か宗教的な活動をしようと思えば、そういうハード面が必要なことは事実です。

私の父は明治42年の生まれで、普通の在出出身でございました。阿讚山脈の奥の山村で生まれ、出家する必要もなかったのですが、8歳で出家して、真言宗のお寺に入りました。それが実相寺というお寺で、今も香川県のさぬき市にございます。それを分家いたしまして、父が神戸にお寺を作ったのですが、そのきっかけになつたのが、本山寺の頼富実毅という方です。お寺を復興するにあたっては、勧進、要するに寄付集めが必要です。そこには中世の頃に五重塔があったのですが、かなり早い時点で焼失いたしておりました。今、札所では五重塔というのが四つ残っています。しかし、古いものは意外と少なく、志度寺なども新しいものです。それはともかく、彼は本山寺に五重塔を再建しました。それからもう一つは南光坊という今治にある寺です。ここはもともとは大三島の大山祇神社の別当寺だったのですが、それが早い時点で、八十八か所で大三島まで行くのは大変だということもございまして、別宮が今治に設けられました。その復興でも中心になって活躍されました。また、高野山大学という、私のいる種智院大学の姉妹校がございますが、それができた時にも、その頼富実毅というのが事務長として活躍したようです。私も遍路に行きだしてから40年ですけれども、やはり讃岐に行きますと、名字で頼富実毅さんのご親族ですかと言われます。もちろんその当時は、結婚されていませんから直系ではございません。しかし、親族からそういう方が出られたということが、私の遍路との関わりの一つの出発点なのです。

実際にそれによって出家したのは父親の方でございます。父は神戸に昭和13年に出てきました。幸い神戸というところは、後背地に四国、それから中国地方や播州がございますから、どちらかというと真言宗関係の方が多く、おかげさまで寺としては非常に隆盛して参りました。その中でやはり父が最初に気がついたのがバス遍路です。それについては四国遍路の歴史にも簡単に書かせていただきました。皆様もご存じだと思いますが、バス遍路というものが昭和20年代の終わりから昭和30年代の初めに始まっています。最初は伊予鉄のバスだという説と徳島の阿南のバス会社だという説がありますが、結果的には、バス遍路の登場というものが遍路の歴史の舞台を大きく変えたというところがございます。四国遍路全体にいえることなのですが、本当は四国遍路というのはお寺やお坊さんが偉くてそれがリードするものではないのです。いわゆる一般の遍路者という方は、そういう上からの指示という形で出来上がってきたものではなく、むしろ修行者から希望して出来上がってきたものです。自慢するわけではないのですが、私の父親は昭和32年にバス遍路というのを始めました。これは当時の時勢にも合いまして、その結果神戸の真言宗のお寺は皆右に倣えという形で、檀信徒を引率したバス遍路を始めました。昔は講という言い方をしていましたが、寺の場合は講とは言いませんので、住職が引率するという形で始まったわけです。これは最近の話ですが、私どもが使用している徳島市営交通が観光部門を廃止するので、来年からそこは使えなくなるそうです。これは一つの時代の流れです。遍路史の中の一面であります。今後はもちろん琴参とか伊予鉄などにお願いしても構わないのですが、時代が流れているということが言えます。

その後、父は30数年前に亡くなりました。当時私はまだ大学院を出たところでしたが、一応私が跡を継がせていただき、毎年大体30名から40名の方を先達して四国遍路に寄せさせていただいております。また、私の勤

務先は、日文研時代の4年間を除くと、種智院大学という弘法大師空海さんが昔建てられました綜芸種智院の後身で、経営的には真言宗の各宗・各派がスポンサーの大学でございます。そうすると子弟の方がよく入学されまして、この愛媛の札所の六か寺ほどが教え子の寺なのですが、そういう形で個人を通しても親しくなります。

それから、先ほど申しましたように、私は曼荼羅の方から研究をスタートして、仏像の方でもそれなりの仕事をさせていただいている。そうすると今から10数年前にNHKが遍路の番組をやりまして、それに合わせまして、こちらの寺院さんの後輩の方がちょうど文化庁や奈良におられ、その御縁もございまして、四国で東寺や高野山も協力した形で大々的な、いわゆる遍路に関する美術展をやりたいと言われました。おかげさまで何とかやらせていただきました。そういう時に少しお手伝いをさせていただいたということもありますし、色々アプローチは違いますけれども、現代の四国遍路の整備と発展に関わらせていただいたわけでございます。

とくに接待との関わり

その中で特に接待との関わりというのがございます。少し自慢話的な最初の部分とは違いますが、こちらは私個人が接待に関してどう考えたか、どう捉えたか、どういう印象を受けたかということと関連するわけでございます。この接待との関わりについては、形の面からまず入らせていただきまして、それからそれを支えた心や思想の方に移らせていただきたいと思います。

四国遍路に40年近く寄させていただいていますが、一つはやはり札所の近くの方々の、ある意味においては自然発生的な接待ということがあります。私の母方の郷里はもう少し海沿いの方です。今のさぬき市という所ですが、そこは今の遍路道ではないのです。ただ後で申しますように、江戸時代の色々な地図や記録の中に接待をする場所というのが出てまいります。それを見ますと、やはり札所に近い所が多いようです。あまり近くない、ちょうど中間で、たとえば宿を貸すというような所は、逆に言うとあまりお寺の門前でない場合もあります。

そういう自然発生的な接待というのもやはり出てくるわけですが、過去40年の中で、最初に私が接待を受けた時はそんなに大きな印象はありませんでした。後ほど詳しくお話しする1番の靈山寺、それから23番の薬王寺、ここに慣習的に和歌山県からの接待講が来ております。ちょうどこれも不思議な縁で、今週の始め熊野参詣をいたしまして、帰りに道成寺、有田、それからお醤油の湯浅という所に寄って来ました。特定のお寺とタイアップするような形は、決して遠くの所ではなくて大体対岸です。そういう接待講というものが江戸時代のある頃から行われております。現在もございます。今日自分で撮った写真があるはずなので、画像資料に入れようと思ったのですが、ちょっと間に合いませんでした。

接待との関わりで、今日ご紹介いたしますが、やはり香川県の出身でございますから、友人や知人が善通寺近辺などに住んでおりまして、現に今善根宿をやっています。一つの例だけですべてを結論付けるのは控えますが、最近の善根宿事情というものを電話取材いたしました。非常に貴重な情報を知らせていただきましたので、それも後でご紹介させていただきます。

車に同乗していただく接待というのは、物ではございません。労力というかそういうものです。私どもバス遍路をやっておりますから、その中でかつてほろりとした遍路の親子の方と巡り合ったことがございます。40歳ぐらいの女性が3歳の子供さんを連れて歩き遍路を今から10数年前になさっておられました。たまたま知人が住職をしている20番鶴林寺に泊まり、あくる日降りていく時に、頼富さんちょっと接待してくれるか、と住職の方から頼まれました。この方々は歩いて今から23番まで行こうとしている、間に21番、22番があるので、どこまでもいいから乗せて行って欲しい、と頼まれました。もちろん、喜んで乗っていただき、同乗の皆さんと心温まる会話をさせていただきました。ただこれは不思議なことというか、おかげというか、その方の仲人さんが大正大学のずっと以前に学長さんをされていまして、私も大正大学との関係がございますので、知っている方だったのです。それも非常に驚いたのですが、数年後にまたまテレビで市民大学をやらせていただいた時に、ご覧になっていたとき、あの時の方だということで電話をいただいた次第です。それはもちろん



とくに接待との関わり

- 札所近辺の住民による自然発生的な接待
- 精山寺、薬王寺での接待講(和歌山県)からの組織的接待
- 友人・知人の善根宿の開始
- 車に同乗していただく接待
- 接待で“人間”が変わった例
- 同行者の間で自然発生した相互接待



偶然といえば偶然でしょう。こういう車での接待もあります。遍路をハード面から必要なものを考えた場合、一つには情報というものが需要です。それからいわゆる宿泊、宿舎ですね。それからもう一つがトランスポーテーション（移動、もしくは交通）です。この三つが関わってきます。そういうものの接待をさせていただくというのも一つの有効な形でございます。

接待で人間が変わった例というのは後の方で申し上げます。次の同行者の間で自然発生した相互接待ですが、これはどちらかというと少し宗教者の面を表に出しすぎた可能性もございます。接待というものは確かに非常に暗い面、ギブアンドテイクの負の面もございます。しかしそれが自然発生的に出てきて、そしてお互いに接待し合うというのは、今までの研究にあった接待とは少し違います。もう少し偶然的な接待、これは高野山などの言っていることをそのまま使わせていただくと、「生かせいのち」ということとも関連するのですが、相互接待という新しい形態が徐々に生まれつつあるということも実感したわけでございます。これは最後の「接待の心」でご紹介させていただくことにして、もう少し具体的なお話をさせていただきましょう。

「接待」（摂待）の辞書的説明

これはご存じかと思いますが、「接待」という言葉を国語辞典で探しますと、大体漢字はこの字（接待）を書くのですが、ごく稀に「摂」という字を書くことがあります。これは仏教の教義の問題になりますが、この「摂」を使うと、法華経の中によく書かれておりますけれども、物や人を受け入れる時、接する時、コミュニケーションする時に、最初にこちらの意見を相手に押しかける、押し付けるという形の付き合い方がありますが、相手の言うことをむしろ受け取るという形になります。そういうことを「摂受」といいます。どちらかというとこの「接」が多いのですが、「摂」で書かれる時があることを少し頭の中に入れておいていただきたいと思います。

普通に日本語で使われるのは、誰々さんに接待をしますという意味で、お客様をもてなすことです。次に、『広辞苑』の2番目に、仏家の布施の一種、と出ています。路上に湯茶を用意し、往来の人にふるまうこと、ですね。多く陰暦の7月に行う、とあります。これは何を意識しているかというと、お四国さんの接待ではありません。古くは平安時代のある時期、空也上人という方が京都で疫病が流行った時に、亡くなった方の遺体の処理、それから念仏を流行らすということもあったのでしょうかけれども、それにプラスしてお茶を皆さんに振る舞いました。そうすると、お茶にはビタミンC等が非常に豊富ですから、ちょっとした病気なら治ることもあります。それが今でも生きておりまして、今は8月ですけれども、六波羅蜜寺の近所で行われているわけです。3番目は、一般にもてなす中の特に食べ物・飲み物を振る舞うことです。辞書にはここまでしかございませんでした。4番目は私が勝手に付け加えさせていただいたのですが、四国遍路あるいは西国巡礼にかつてあった接待は、これをもう少し特化させたものです。遍路者や巡礼者に対しての有形無形の接待、先ほどの車に乗せてあげたことも実は一つの接待です。それから宿を貸すということは、形は見えるのですけれども、より古い接待なのです。この四国遍路等で使われる場合には、しばしば上に「御」が付きます、御接待といわれます。これは後で接待の御詠歌をご紹介します。亡くなった私の家内は特に御詠歌にはかなり力を入れておりました。接待に対して御詠歌でお返しするというのが一つのお返しの仕方です。接待していただいた方に納め札を差し上げるというやり方ももちろんあるのですが、御詠歌できる方はちゃんと決まり文句があります。それも後で御紹介します。

接待の主体の三形態

接待はどなたがするかということに関しては、色々な専門の方の御研究がありますけれども、関西大学の前田卓先生の『巡礼の社会学』をちょっとお借りいたします。少し言葉を変えているところはあります。これは成立の順番等もございますが、最初はやはりaの個人接待からスタートしたんだろうと思われます。よくいえば信心深い方、あるいはある程度財力の許す方が物を差し上げるということ、物ではないけれどもお宿を貸すこと、これらがどちらかというと四国遍路の中では、接待の始まりとは申しませんが、古いタイプです。社会学



「接待」（摂待）の辞書的説明

1. 客をもてなすこと
2. 仏家の布施の一種。路上に湯茶を用意し、往来の人にふるまうこと。多く、陰暦7月に行う
3. 一般に、湯茶・食事などをふるまうこと
4. 巡礼者や遍路者に対して、有形・無形のほどこしをなすこと。「おせつたい」とも呼ぶ。

（『広辞苑』、『広辞林』による）

などで常に研究の対象となるのが b と c です。b の村接待は、札所付近の住民が物品を持ちより集団で接待するものです。最近はかなり減りましたが、私の母の実家等ではかなりやっておりました。そしてそれはいわゆる年中行事的なところもあります。これはやはり季節の移り変わりの中に、宗教文化というものをはめ込みまして、それを実感するということもございます。c の遠隔接待は、星野英紀さんをはじめ色々な方の研究にすでにあります。本当に不思議な縁ですが、一昨日和歌山県の有田・野上を通りましたが、そういう所とほぼ対岸にある 1 番札所、23 番札所等とは現在も繋がっております。200 年を超す歴史があるということですね。

 <h3>接待の主体の三形態</h3> <p>(前田卓『巡礼の社会学』)</p> <ul style="list-style-type: none"> a. 個人接待 <ul style="list-style-type: none"> ・通路道沿いの住民 ・篤志家が出向く ・善根宿 b. 村接待 <ul style="list-style-type: none"> ・札所付近の住民が物品を持ち寄り、集団で接待する ・行事的な要素が強く、とくに春に集中する c. 遠隔接待 <ul style="list-style-type: none"> ・靈山寺と薬王寺に残る紀州の三大講が有名 	 <h3>狭義の接待（村接待）の起源</h3> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 熊野参詣における継桜王子（中辺路の中間に位置する）の村（部落）接待が古い例 ◆ 文献資料、平行史料を摸索中 ◆ 熊野参詣、西国巡礼、四国遍路には、影響関係があることが窺われる
--	--

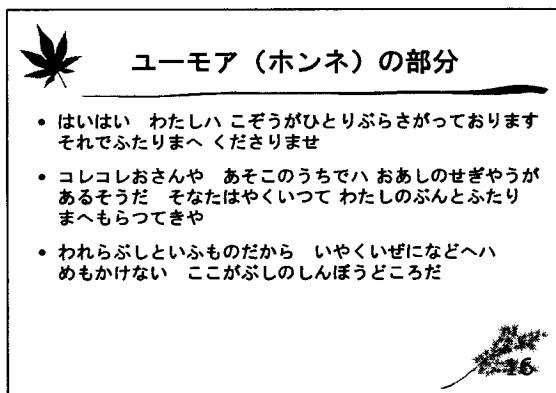
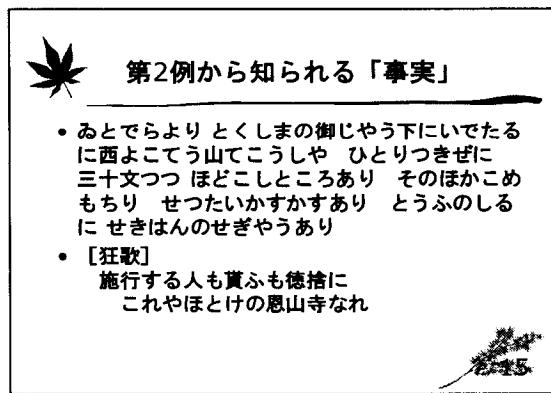
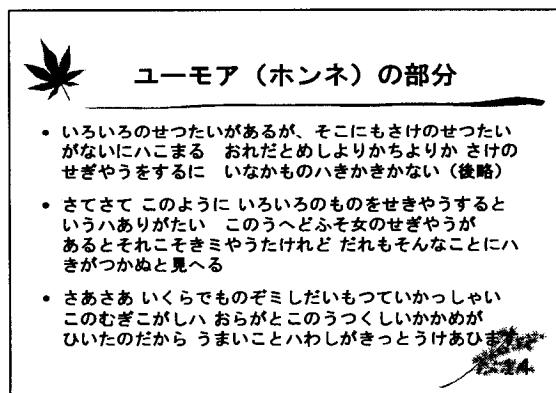
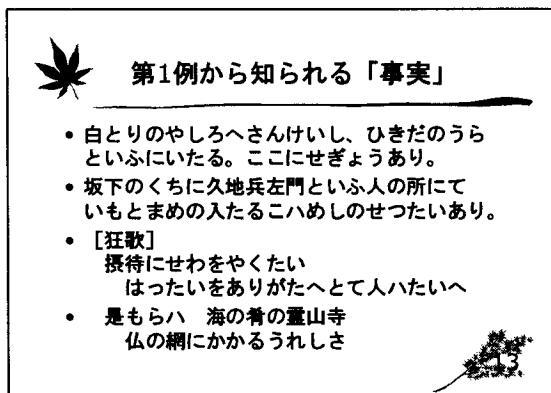
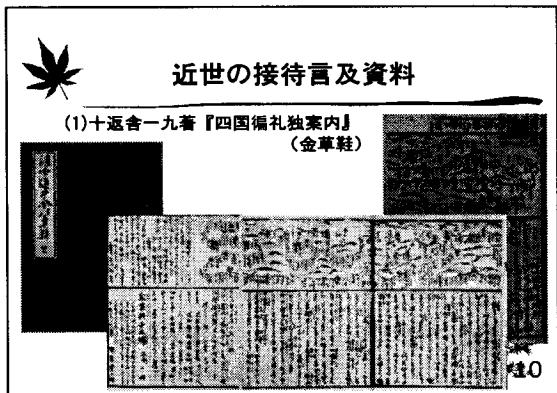
狭義の接待（村接待）の起源

村接待については、まだ検討中ですが、やはり色々調査やお参りに寄せていただきますと、思わぬ知的な収穫、あるいは知恵だけでは留まらない宗教的な収穫もあります。先日熊野へは田辺から中辺路というコースから入りました。もちろんバスでございます。120人くらい連れておりましたので、いちいち降りるわけにはいきませんでした。牛馬王子や滝尻王子には以前に個人で調査に行きましたが、ちょうどその中間に継桜王子という所があります。これは口頭でお聞きしましたから、まだ実証はしていないのですが、そこが昔から熊野参詣をする方に、いわゆる宿等の接待をする部落として知られていたようです。ただ残念ながら、その時は現地で調査はできませんでしたので、あくまでヒアリングだけでした。ですから、文献史料や平行史料は模索中です。熊野参詣の接待というのは、最初の頃の白河法皇や後白河法皇は京都から100人、200人単位で参詣しましたが、そういう方々を接待したものなのか、もう少し時代が下がり、中世あるいは近世になって、いわゆる熊野比丘尼や熊野験者が通った時の接待なのかということがまだわかっておりません。ただ、これは私だけではなくて、すでに歴史の方で熊野参詣の接待というのは確かにあったということを色々な方がおっしゃっています。残念ながら、まだ文献を探索中でございます。いつも申し上げておりますように、熊野参詣、西国巡礼、その後の四国遍路というのは、なにかヒントやイメージを借りているところが多いということは言えるかと思います。

3、近世の接待

近世の接待言及資料

さて、もう少し具体的に話していきます。資料はたくさんあります。江戸時代には、すでにこの接待というものがたとえば文学の中に現れています。いろいろなケースが知られております。これはもうこちらの先生方もお気付きですし、色々な方も調べていますから不思議なことではありません。ここに原本があります（図10）。『東海道中膝栗毛』などを著した戯作作者、十返舎一九です。その『金草鞋』（四国徳礼独案内）の中に、一か所ではなく数か所に接待の言及がございます。そこには、この著作の内容上、事実を紹介するとともに、戯作作者ですから、少しおちよくっているところがあります。しかし、それだけ本音の部分も見えてくるわけです。たとえば、図11は一番有名な 1 番札所のところのものです。その詞書きで多少関係するところを図13に挙げておきました。その中で、どこで接待が行われていたのかという情報を提供しております。大窟寺を打つと、大抵今の場合は田井という所に戻りまして、それから徳島の吉野川の上流に降りてきますが、昔は必ずしもそうではありませんでした。その場合には白鳥という所に行きます。倭建命が白い鳥になったという伝承のあるところですね。白鳥神社にお参りして、引田に行きます。図13で注意していただきたいのは、「せぎょう」あり、とあることです。これが接待の意味で使われております。「せぎょう」はどういう字を書くかと



いうと、「施」という字と、それから「行」という字です。つまり、布施を行うということなのです。

次に、具体的にどういう内容なのかというと、「いもとまめの入たるこハめしのせつたいあり」とあります。ここでは「せつたい」という言葉を使っています。やはりあの十返舎一九ですから狂歌が入っています、「接待にせわをやくたいはつたひをありがたへとて人ハたいゝゝ」とあります。「たい」をいう言葉を活かしています。「はつたひ」というのは麦こがし（はつたひ粉）ですが、その接待もあったということになります。ただ、そういう事実を証明していると同時に、やはり少しおちょくっているところがあります。それはその人の言った台詞の中に、図14のユーモア（ホンネ）の部分というところですが、「いろいろのせつたいがあるが そこにもさけのせつたいがないにハこまる おれだとめしよりかち（お金）よりか さけのせぎやうをするに いなかものハきかきかない」とあります。自分だったら酒を施行する、さらに失礼なことに、田舎者は気が利かない、というのです。これは、十返舎一九が一緒に行ったのかどうかわかりませんが、江戸からの視点ですね。

図12に戻りますが、こちらの方はあまり気が付かれていらない接待です。右の方の人が、お金30文を差し上げています。30文というのはそんなに少ない金額ではありません。そして3人の人が手を出しています。それに対してその本音の部分があります（図15）。場所はどこかというと、徳島の城下から少し出た恩山寺に行く所です。「三十文つつほどこしところあり そのほかこめもちり せつたいかすかすあり とうふのしるに せきはんのせぎやうあり」。先に言いました「せぎやう（施行）」という言葉が出てまいります。これは事実を書いてあると思います。先の図は3人組だったのでしょうか、また次のようにあります（図16）。「はいはい

わたしハコぞうがひとりぶらさがっておりま それでふたりまへ くださりませ」。これは、お腹が大きい、それで2人分下さい、ということらしいですね。御寮さんが、腹の大きい下女に2人分もらって来いと言ったようです。その次には、それを好きなように使ってもかまいませんよ、とあります。

おもしろいのは、その次です。「われらぶしといふものだから いやくいぜになどへハメもかけない ここがぶしのしんぼうどころだ」。そう言われてみれば武士の遍路というのではありませんかね。武士にとって遍路がどうであったのかということも一つの考えるべきことかもしれません。とにかく接待は絶対に貰わない、というのはやせ我慢でしょうか。これは、なるほどな、という気がいたします。このように色々な接待がありました。これは1802年の刷りですから、今から200年少し前のものです。

近世の善根宿

善根宿の方は資料にたくさん出ております。広義の接待の中には、遍路者を無料で泊める善根宿も含まれています。いわゆる辺路屋と違うところは、辺路屋というのは常設であり、しかもお金を取ることです。その他に、今回この講演会のポスターの中に出ている四阿があります。壁がなく四本柱があるお堂で、これは茶堂であったり、大師堂であったりします。場合によっては遍路がそこで寝泊まりすることもあったかと思います。そういう少し古いタイプのものもありますが、善根宿は、最近、仏事（法事など）があった人が遍路に宿を貸すというものです。これは、澄禪の『四国遍路日記』の中に、宇和島の方の記録がございます。澄禪の記録はなかなか読み方が難しいのですが、一応事実と仮定いたしますと、江戸時代初期にはあったと考えられます。ただ、接待する側の記録というのは、後でお話する和歌山県の接待講の方々がお寺に納めた資料以外にはありません。現代の善根宿も御紹介いたしますけれども、その方も宿帳というものを一応作っているのですが、書かなくてもいいよ、とされていて、置いてあるだけです。だから、なかなかフォローしにくいのです。

この善根宿に関しては、かつて一緒に本を書いた私の教え子で、私より先に四国遍路の研究をしていた白木利幸君が、近藤先生の説を少し批判しています。『四国辺路道指南』増補大成本の中に、村の名前と「せんにん」と書かれてあるのです。これは我々の説ですけれども、いわゆる昔の文章ですから濁らないことが多いので、それはむしろ接待をしてくれる「善人」であると捉えさせていただきます。そういう善根宿が各々四つの国に出てまいります。図19は阿波の三か所です。だいたい札所と札所の間です。図20が土佐の五か所です。もちろん、これ以上あったと思います。それから、伊予が一番数が多い説でございます。その場所については、どこどこ村の、何番から何番の間とあります。そして、右端の方に、何兵衛・何の何兵衛、この頃は名字がほとんどありませんので名前だけでもあれば上出来ですが、「甚之助、やどかす」などとあります。ほとんどが「やどかす」です。時々、「ほどこし」というのがありますが、これは脚綆などを施すものです。そういう物を施すことがあります、たいてい無料で善根宿を貸す、そういうところがあるということになります。



近世初期の善根宿

- ・広義の接待の中には、過路者を無料で泊める善根宿も含まれる
- ・常設の宿泊施設である辻路屋とは異なり、接待主の先祖の命日などを中心に行われる
- ・いつ頃から始まったのかは不明
- ・澄禪『四国遍路日記』には、宇和島の今西伝介などの善根宿に宿泊した記録があるため、江戸時代初期にはすでに存在した
- ・接待主側の記録は皆無に近く、動機等は不詳



近世中・後期の善根宿

- ・真念『四国辻路道指南』増補大成本には、いくつかの村に「せんにん」の記載がある
- ・近藤喜博説：仙人隠者か里山伏のような一種の行者
- ・白木利幸説：「善人」接待や善根宿を提供する人々
- ・明和4年(1767)版の増補大成本には、「せんにん」のいる村が23カ所挙げられる



善根宿と提供者① 阿波

かうの村	第16番～第17番	おゑつか第三右衛門、 過路をいたはりやとかす
(2) おほ坂	第22番～第23番	清左衛門、やどをかす
(3) いな村	第23番～第24番	市兵へ、やどをほどこす



善根宿と提供者② 土佐

(4)	の跡浦入口	第23番～第24番	五郎右衛門、やどをかす。 其外、志ある人多し
(5)	くれ村	第36番～第37番	たちはな豊平兵衛、小左衛門、 やどをほどこす。そのほか、 こへろざしある人有り
(6)	かけの村	第36番～第37番	武兵衛、やどかす
(7)	くぼ川村	第37番～第38番	七郎兵衛、やどをかし、善根なす 人あり
(8)	すくも村	第39番～第40番	与助、やどをかす



善根宿と提供者③ 伊予

(9) まき村	篠山権現～第41番	庄屋長左衛門、やどかす
(10) 野井坂村	同上	伊左衛門、延宝年中、七とせの間、過路に足半 をほどこし、志ふかき人、宿かす
(11) 下村	宇和崎	こん屋庄兵衛、やどかす
(12) わかみや村	第43番～第44番	喜之助、やどかす
(13) 中たど村	第43番～第44番	
(14) たかみ村	第47番～第48番	九郎兵衛、吉左衛門其外もやどかす
(15) あはい村	第53番～第54番	
(16) さくらみ村	第59番～第60番	こんや伝エ衛門、やどかす
(17) ぐぢやう村	第64番～第65番	与右衛門、やどかす
(18) 中の庄村	第64番～第65番	
(19) あさきのお村	第65番～第66番	



善根宿と提供者④ 讀岐

(20)	つし村	第66番～第67番	文左衛門、九十一郎、左衛門、 やどかす
(21)	大見村	第70番～第71番	
(22)	たい村	第85番～第86番	皆みな志有り、やどかす
(23)	しふ村	第85番～第86番	ひがしき町庄三良、やどかす

過路者に善根宿を提供する社会運動が、先に人々の間に普及し、物品・金品を布施する「お接待」の方は、当初はむしろ散発的に発生した可能性



家は広い家でしたら、たくさん泊まれます。讃岐にもございまして、これは『四国辺路道指南』に出てきます。すでに江戸時代の中頃にはいわゆる善根宿というものもかなり普及していたということがわかると思います。ただ、社会的にみた場合には、やはりこの善根宿、いわゆる無料宿泊の方が先に普及した可能性があるのではないかと思います。これはなかなかどちらが先か決めにくいのですが、物品や金品をお布施するお接待の方は、あつたけれどもむしろ散発的なものではなかったかと考えております。やはり江戸時代のこの頃には少なくとも善根宿、それから個人の接待という形態は行わっていたと考えてよいと思います。

現代の善根宿事情

これは最近の話ですが、香川県の善通寺市に高等学校の英語の先生をされていた女性の方がおられます。その方は、退職後亡くなられたお父さんの家を相続されて別棟が空き、そして非常に大師信仰の篤い方ですので、今から15年ぐらい前から善根宿を営んでおられます。私と知り合うようになったのは、司馬遼太郎さんの『空海の風景』という本を英訳されたことがきっかけです。その時に専門用語などをどう訳すかということを少し教えていただきました。直接やっておられる善根宿に関する聞き取り調査ですが、実際どのようにされているのかを聞きますと、やはり宿泊だけで食事は自分で取っていただいている、そして先ほど言いましたように、宿帳というはあるけれども、それを書かない方も多いとのことです。また、以前にちょっとした小火があったので、火類は原則として使わない、その代わりもちろん無料で提供し、入退室の挨拶等は特に設けていないそうです。では、だいたいどのくらい来られますかとお聞きしましたら、多い時と少ない時とがあつて、春秋は大体月に20人から30人くらい、しかし、12月や1月は1人か2人、あるいは0人ということもあるので、平均してだいたい10名から20名くらい、そしてなぜか今年は少し減っているとのことでした。



現代の善根宿事情

香川県善通寺市丁氏宅

動機

- ・もともと大師信仰が篤い
- ・親から相続した別棟が空いた

形態

- ・宿泊のみ、食事はなし
- ・宿帳に相当するものは一応置いているが、記入しない者もいる
- ・以前に小火騒ぎがあったので、ガス等は使用しない
- ・無料で提供し、入退室の挨拶はとくに設けていない
- ・利用者は月平均10~15名程度。やはり春・秋が多い
- ・平成22年度は、多少利用者数が少なくなっている
- ・ヨコ（善根宿同士）のつながりは全くない

— 23 —



現代の善根宿事情

香川県善通寺市丁氏宅

広報・情報

- ・積極的にメディアを通じて広報していない
- ・善通寺の寺務所を窓口としており、そこからの紹介者を受け入れる

問題点

- ・これまでに飛び込みの利用者もあったが、いずれもが小火・暴力事件・暴行未遂のトラブルを起こした
- ・受け入れの規模や接待の方法をとくに発展させる予定も心づもりもない
- ・宿泊接待で喜んでくれる人がいれば、それで満足
- ・職業道路と見受けられる人も、年間2~3名ほどは利用している様様

— 24 —

注意すべきは、横の、つまり善根宿を提供されている方々同士の繋がりや連絡はない、と言われたことです。それは確かにある意味では人の善意でやっているわけですから。NPOにしてはどうかという意見もあつたらしいのですが、そこまでするつもりはない、という話でございました。次に、実際どのようにして遍路さんにそれを伝達しているのですか、とお聞きしました。そういうメディアというのは、最近は色々な情報提供があり、また場所が善通寺の側なので、お寺に言ってある、希望者がいたらお寺の方から連絡が來るので受け入れる、ということでした。さらに、何か困られたことがありますか、とお聞きしました。その時はあまり多くは語っておられませんでしたが、お寺からの紹介はほとんど問題がなかったけれども、どこで聞いたのかはわからないが、飛び込みで来られた方がおられ、その時に警察が入るようなトラブルが少しあったそうです。これを悪く言うつもりはありませんが、そういうこともないわけではないというのが事実かと思います。現在のところは、今のシステムをより公共的にとか、メディアに開放して、ということは考えていない、あくまでそれは接待であるから、喜んでくれる人がいればそれで結構だ、それから今はあまりいないけれども、職業遍路と見られる方も、2、3名くらいはいるような気はしますが、詳しいことは聞けません、とのことでした。それはそうでしょうね。そういうようなお話をいたしました。これは一つの例ですから、それですべてを類推してはいけないと思いますが、今の接待の抱える一つの問題点を表していることは事実だと思います。

4、接待講

接待講というボランティア型支援集団

接待講は、古代から中世にかけてはほとんどなかったものと思います。やはり四国遍路が江戸時代の元禄の頃に一般化しまして、誰でも来れるという開かれたシステムになったということと関連すると思います。

ご案内のように、有田接待講、野上接待講(野上施設講)、そして紀州接待講の三つの接待は今でもあります。これらの接待講の活動の場は全て徳島です。第1番薬王寺の仁王門に入った所の向かって右側に有田接待講と野上接待講があります。これは時間的に使い分けをしておりまして、接待期間が確か有田接待講の方が早かったと思います。それが終わったら野上接待講という形になります。それから、23番薬王寺の紀州接待講は、和歌山県をもう少し中に入った、紀ノ川の中流域辺りのかつらぎ町というところです。今はかつらぎ町という名前でないかもしれません。私も30年、40年の間にここで何度かお接待をいただきました。その時もっと学術的に統計を取つておけばよかったのですが。

野上接待講（野上施設講とも）

詳しく説明いたしますと、野上の方がだいたい寛政元年頃の成立です。面白いのは、現在の接待所の建物は、今はまた変わっているかもしれません、有田と野上が折半して、一応有田の方が6割出したのですが、協力して再建したのです。そしてここでどういう接待をいただいたかは、西端さかえさんという方が四国遍路の遍路記に日記風に書いていまして、菓子一袋とちり紙一束、梅干し一包、それから草鞋を一足受けたとあります。映像はこの本の中身です（図27）。

野上接待講

- 寛政元年(1789)の成立
- 現在の接待所の建物は、昭和11年(1936)に有田接待講が6割、紀州野上接待講が4割の費用を出して再建
- 昭和33年(1958)に遍路した女流作家で、『四国八十八札所遍路記』を著した西端さかえは、菓子1袋とちり紙1束、梅干し1包、草履1足を受けた

西端さかえの記述

「世話人の人たちは、弘法大師の慈悲行を手伝わせていただくような気持で、よろこびと感謝にみちて働いておられた」

接待された菓子袋裏の印刷文

本接待所は、今から百六十余年前より、紀伊の国の信仰者により、弘法大師様の御恩徳を受けられた方々の浄財を集め、四国靈場御巡拝の方々に御接待申上げて、毎年度各位の御高配を受けており、私たち世話人一同感謝しております。本年度も些細な接待物でございますが、何卒紀州の信仰者の心をお受けくださいませ。

和歌山県海草郡野上町
弘法大師四国八十八ヶ所
第一番札所薬王寺
紀州野上接待所

接待品の目録

目録	
一、金參万五千七百九十四円	一、麥 巻斗九升
一、米 巻石七斗八升	二、茶 十六貫目
一、大豆 四斗八升	一、草鞋 二十六足
一、車履 三百八十足	一、薪 巻百二十貫
一、甘藷 八貫	一、漬物 二十一貫
一、木炭 四俵	一、手拭 巻百六十枚
一、生大根 四百六十本	一、薬綿 参丸
一、鹿鳴木 三百本	
一、その他 牛蒡 人參 真菜 蕎麦 タワシ 朝菜 供物沢山	

右 昭和三十三年旧二月 紀州 野上接待所
薬王寺 芳村智全殿

ちょっと引っかかったことは、この西端さんの素直な気持ちをどうこう批判するつもりはないのですが、この本の中に「世話人の人たちは、弘法大師の慈悲行を手伝わせていただくような気持で、よろこびと感謝にみ

ちて働いておられた」とあることです。素直にそのまま読めばそんなに問題はないのですが、これは接待というものを宗教行為としてどのように考えるかです。いろんな考え方がありますが、この弘法大師の慈悲行というのが少しありにくいですね。後で申しますように、四国遍路の接待は現在もなくなっているのですが、西国の場合はもう数10年前に途絶えました。組織的にはもはやございません。しかし、四国は衰弱はいたしましたけれども途絶えないのは何故かといいますと、やはり参っているお遍路さんが弘法大師と異ならない、あるいは弘法大師の姿を変えた現れという、そういう信仰が昔から強いですね。ところが西国の場合は、それはあくまで一人の巡礼者であり、観音様の現われなんていうことはありません。そういう捉え方ではないということです。その辺が大きなポイントになるのですが、西端さんの足を引っ張るわけではございませんが、この日本語はどう読むのかな、という気がしないでもございません。まあ、そんなに目くじらたてることはございませんが。

ところで、実際に接待する側の気持はこういう文章で表わされています（図28）。「本接待所は今から160余年前より、紀伊国の信仰者、弘法大師様の御恩徳を受けられた方々の淨財を集め・・・」とあります。つまり、和歌山から四国をお参りして帰った方々が淨財を集め、そしてまた今度持って行って、四国でお参りされている方々にお接待申し上げるという構造になっています。その一番最後に「何卒紀州の信仰者の心をお受け下さいませ」とあります。さきほどの読み方もそんなに目くじらをたてることではないかもしれませんね。お大師様、弘法大師様の御恩徳を受けられた方というのは、こちらの人です。そして向こうに行って今遍路している方に接待させていただくのです。それが紀州の信仰者の心ということになります。これは最後に申しますが、ちょっと難しい構造というか、二重構造みたいになっていますが、いわゆる福田思想ということと関連いたします。

接待の中身、これはいちいち申し上げませんが、お金をみんなで少しづつ集めてこれだけになります（図29）。これは昭和33年の3万円ですからそこそこの金額ですね。これは野上講のものです。米、大豆、草履、そして護摩木というのがちょっと面白いですね。これは使えないことはないのですが、やはり護摩を焚く所で祈願を書いてそれを納めるという意味があったのかもしれません。だいたい接待は身近なものすぐ使うものまとめでみなさんに差し上げて、最後に目録をお寺に納めるという構造であったようです。

有田接待講

有田接待講も同じ所で接待します。これは4月になってからですから、こちらの方が後だったと思います。文政元年に始まっておりまして、紀州の箕島辺りに天甫山大師堂というのがございます。やはり大師信仰というものが基本にありますと、そのお堂を中心に弘法大師を信仰する人びとが集まつた、そういう講です。大正7年に「弘法大師献供物品接待開始一百周年記念」の碑を建てました。接待品というものは先ほどとあまり変わりません。最近は、品物よりも手拭い一本に絞るという傾向が強くなっています。



有田接待講

- 旧有田郡を中心とした接待講
- 第1番雲山寺仁王門脇の接待所で、4月初めの1週間行われる
- 接待開始は、文政元年(1818)
- 箕島の天甫山大師堂を拠点とした講
- 大正7年(1918)に「弘法大師献供物品接待開始一百周年記念」碑を建立する
- 接待品は、ミカン、菓子類、現金、タオル、手拭い、ちり紙など



紀州接待講の接待

もう一つ、最後の紀州接待講は、薬王寺の前で接待します。春の彼岸の終わりから少し長い期間です。ちゃんと記録がございます。ただ、文政元年とその前年というのは、偶然ですけれども、歴史上は幕府の方から僕約令が出た年なのです。僕約令が出たということと接待が始まつたこととは、因果関係があるかないかは少し微妙なところですが、三つの内の二つがほぼ同じ年に、一年前後で接待を始めているというのは決して偶然でないかもしれません。

接待品はまず和歌山で集めて彼岸が終わると、それを持って四国へ行きます。接待船で紀ノ川を下り、あちこちの部落で世話人が集めていたものを積んで和歌山港を持って行きます。それから、日和佐から来た船に頼んで、お世話する方々と接待品を載せて四国に渡ります。戦後は一時途絶えておりましたが、昭和31年に渡客船になり、現在はフェリーで車に載せて行っているということです。こここの講は、現在ほとんど手拭い一本でやっているそうです。生ものはなかなか難しいということでございましょう。



紀州接待講の接待①

- ◆第23番薬王寺門前の接待所で、春の彼岸の終わりから、1~2週間行われる
- ◆明治時代初期の『紀州接待講記録』によると、文政2年(1819)に、武士によって始められたとする
- ◆世話人が家々を回って喜捨を募り、接待主に受領書と大師御影、お守りを渡した



紀州接待講の接待②

- ◆彼岸が終わると、接待船で紀ノ川を下り、途中で接待の品を積んでから、和歌山港に至る
- ◆ここから日和佐から来た漁船に頼んで、講からの参加者と接待品を載せ、四国へ渡った
- ◆昭和31年(1958)に再開されてからは、定期客船を使って、四国へ入っている
- ◆接待品も、当初は飯や沢庵などの食品が主だったが、最近はすべて手拭いとなっていた



衰退した対岸接待

対岸接待と呼ばせていただきますが、これには地理的な問題がございます。特に紀州は四国・徳島に近いということと、それから四国遍路が終わると高野山にお礼参りをするということがよくいわれております。88番札所の住職とこの話をしたのですが、こんなことうち言つた覚えない、それは高野山の陰謀だ、というような言い方をされました。しかし、澄禅さんは最初高野に行っていろいろ話を聞いてそれから四国遍路へ行きました。ただ、澄禅さんはもう高野山へ帰らなかつたのですが、お礼参りということがいつしか言われるようになったことと無関係ではないと思います。

やはり対岸が大切な考えです。四国に橋が架かる時にも必ず相手の県とペアを組みます。昔なら徳島と和歌山が組むのですけれども、ご承知のように今はちょっとそういう状況ではありません。状況が違っておりますから、兵庫と組んだのですね。岡山と香川、それから愛媛と広島もしくは九州の大分、豊後ですね。それから讃岐の弥谷寺と道隆寺にも岡山の接待講が入っていました。また、確認はしておりませんが、太山寺には豊後の方から接待講が来ていたというように言われております。やはり対岸で接待の文化というものをお互いに保っていたというのは事実だと思います。



衰退した対岸接待

- ◆紀州以外の接待講は現存しない
- ◆第2次大戦前までは、各地で盛んに行われていた
- ◆文化元年(1804)開始の和泉接待講は、150名規模の集団で接待を行った
- ◆讃岐（第71番弥谷寺、第77番道隆寺等）には、対岸の岡山・広島からの接待講
- ◆伊予（第52番太山寺）には、九州豊後からの接待講



形を変えて生き続ける個人接待

- ◆組織的な集団接待は、モータリゼーションの普及や、接待講員の高齢化によって、次第に活気を失っている
- ◆それでも代々相承されている家訓や信心によって、個人接待は現在も続いている
- ◆とくに遍路同士の互助的な接待も見られる



形を変えて生き続ける個人接待

現況を見ますと、集団接待というのは残念ながら少し下火でございます。星野さんが言っていたように、最大の理由は高齢化で、なかなか後継者が育たないので。また、それだけの時間がかけられないのです。しかし、それでも代々家訓とか信心・信仰によって接待講による接待もまだ続いていますし、個人接待も現場で続いている。そして、最近少し見直されているのが遍路同士の接待で、これは新たに登場したものといえるでしょう。

返礼の作法

さて、接待いただいた場合の返礼の作法ですが、これはご存じだと思いますけれども、接待は原則として断らないものです。どうしてもという場合は事情を説明することも可能です。接待はその人にいただいたというよりは、その人に姿をとつて現れているお大師さんに差し上げた、接待しているということなので、原則として拒まないというのが礼儀といわれております。そして、その代わりにということではないのですが、接待を

受けられた方から何か福をえます。これは全く違う話ですが、先週東南アジアの佛教者の方々といろいろ議論した時のことです。これはご存じの方もいらっしゃると思いますが、東南アジアのお坊さんというのは食事・料理などは一切できません。戒律で禁止されていますから。その代わりに托鉢して接待を受けるというものです。それに対して返礼は何かというと、パリッタという非常に短い祝福の真言を唱え、それによってその方が幸せになるようにと、お唱えをします。それが返礼なのです。納め札を授与するというのは、それに近い構図を持っております。そして、昔は接待していただいた納め札を讃岐などでは小さな米俵に入れ、たくさん貯めて上からつるしておいて、一種の魔除け、お守りという役割を果たしていました。残念ながら今はそうした例は少なくなりました。やはり、お大師さんに代わって四国をお遍路しているのですよ、という福德を持った納め札をお返しするのが一応の礼儀です。そして、もう少し正確に、丁寧にする場合は、「お茶の功德」という御詠歌がございます。それはこの後でまたご紹介しましょう。

返礼の作法

- 接待を受けた際は、遍路する弘法大師として尊崇されているので、接待の意思表示がなされた時には、拒まないのが原則である
- 大師靈場参拝の福德を返礼する際には、記名した納札を授与する場合が多い
- 最も丁寧に返礼する際には、御詠歌の「お茶の功德」を唱える場合がある



35

5、接待の心

遍路たちに対する同情心

最後にいよいよ心の問題に入ります。接待を捉える場合、社会学的に捉えることも可能でございます。今のところ、どちらかというと精神的に捉えておりますが、かつて前田先生は3項目くらいに分けられました。私は3番目を省きまして、別の項目を入れさせていただきました。一つはやはり難行苦行する遍路たちに対するいわゆる慈悲憐れみの心、同情ということです。これは事実だと思います。西国にもあった接待というのはこれに近いと思います。四国の場合には、特に衣食住など遍路苦労も多い遍路者に対して、純粋なというか、気の毒にという意味で、少しでも相手が幸せになっていただきたいという同情と、それからそのための布施と、これがスタートです。歴史学の新城先生などは、これが非常に強いのだとされています。いわゆる遍路を支援するという意味が強いのだということです。今日はあまり触れられませんが、遍路といういろいろなタイプが

接待の心 一動機・目的一

[前田卓『返礼の社会学』を参考に](#)

(1) 難行苦行する遍路たちに対する同情心

- 西国巡礼と比べて、衣食住などの遍路苦労が多い遍路者に対して、慈悲的・福祉的な同情と布施
- 新城常三氏の、四国住民による一方的な遍路支援説
- いわゆる「暗い遍路」の救済・支援については、表面上該当するが、逆の要素を含んだ遊山性の濃い「明るい遍路」については、必ずしも当てはまらない

36

接待の心 一動機・目的一

- 社会学的には、接待を当てにした遍路、換言すれば生活・生存の手段としての接待を利用した職業遍路の発生とも無関係ではない
- 接待には、苦労する遍路への慈悲・救済と、職業遍路からの無理強いの両義がある



37

接待の心 一動機・目的一

- この問題には、慈悲・救済と受け取る側の甘え、福祉保護と自立支援などの社会的に困難な問題とも無関係ではない

- 乞食遍路・職業遍路の増減

- 西国巡礼では、皆無とはいわないまでも、職業巡礼の数はもっと少なかったのではないか

38

接待の心 一動機・目的一

(2) 大師信仰に基づく作善

- 遍路者に施しをすることは、お大師さまへの供養と同義。それによって人びとは善根を積もうとする
- 善根宿がその典型例
- 善根を積むことによって功德を得るという考えは、接待する四国の人びとに共通して見られる心性である
- 西国巡礼では、近代には接待の風習が絶えた。西国巡礼では、接待の対象である巡礼者をあくまで人間と捉えるが、四国遍路では遍路者を大師そのものとする信仰が根強い



39

ありまして、現在でも職業遍路の方がいないわけではございません。その方を非難するつもりは毛頭ございません。それも一つの生き方だと思います。しかし、そういう方々に対して支援する、気の毒に思うというのには、これは事実、その通りです。ただ西国では意外とこれはあまり続かなかったというのは、どちらかというと四国に比べて西国の方がもう少し気楽な巡礼というところが強いからです。もちろん、しんどい巡礼さんもいらっしゃいますけれども、かなり物見遊山的な要素が強いですから、それに関しては同情ということだけではちょっと説明はつかないと思います。

もう一つ、社会学もしくは文化人類学的に捉えますと、特に暗い遍路という場合は、接待をするからそれをあてにして、いわゆる職業遍路の方とか、どうしても生きていけない方がやって来るということも、おっしゃる通り事実です。現に四国遍路を修行苦行のきつい意味で捉えますと、先達の方も時々言っておられます。たとえば1か月遍路に来たら、たとえ金銭的、あるいはその他の苦労はなくても、1日から2日は托鉢をして下さい、と。これはお大師さんの苦労を偲ぶためです。遍路というものは、自分探しとかいろいろな意味が持てます。また、あちこちに祈願をしていろいろなお願いもできます。それはそうですが、やはり遍路の目的の中には日々生きていくために遍路をしなければいけないということもあるわけです。托鉢を意識的にやらなければいけないというのは、決して困っているというだけではなくて、修行を体験するという意味に捉えることも可能ですから、先ほど申しましたように、1日、2日でも托鉢しろという指導をされる先達さんもおられます。

接待には互換作用があります。東南アジアでは、あれだけたくさんお坊さんがいるのに革命が起こりません。必ず毎朝6時に托鉢に来るというのはわかっておりませんから、それに対して一般の方々は、今もビニール袋にご飯とちょっとしたおかずを入れて、それを差し上げています。これは、考え方によってはギブアンドテイクなのです。それによって福德の真言、パリッタをいただくということでございます。だから社会学的な人間関係等で申しますと、ギブアンドテイクというところは、確かにございます。そのことは決して否定するわけではありません。そしてここに書いておりますように、非常に難しいのが福祉の問題です。これについては、私どもは仏教福祉学科というものを今から30年ほど前に作りまして、事前相談の時に文科省とかなり議論しました。なぜ仏教学科で福祉がいるのだと。最終的には了解していただいたのですが、福祉保護と自立支援とには確かに相反するところがございます。しかし、仏教ではみんなが幸せになるということは当然のことです。特に大乗仏教はそうです。これはお坊さんだけがどうこうということではございません。自ら悟りを求めるとき同時に他の人も一緒に同じような幸せを味わうべきであるということをございましょう。ですから、そういう難しい問題は潜んでおりますけれども、先ほど申しましたように、気の毒で差し上げるという純粋なところは出発点の一つになると思います。

追福祈願

そのことを示すために、接待のお礼に対する御詠歌がございます。これは実際に唱えられる人が減りましたけれども、私どもは一応大和講総本部に所属しておりますので、母や家内などと一緒に遍路した時には、もしお接待があればお返ししております。

「たちよりて、お茶のくどくのあしやすめ 慈悲ある人のおなきに しばし憩の杖とめて 心こい茶のしたつづみ ふるさと遠く足曳の 旅のつかれもわすれけり 厚き恵みのおもてなし このよのくどく のちのよのため」

 **接待の心 一動機・目的一**

(3) 先祖の菩提をどう弔うか

- 西国巡礼では、先祖や故人の追福祈願がなかったわけではないが、現世利益を求める面の強い觀音信仰がベースであったため、接待の動機・目的に追福菩提・追善があげられることは、比較的少なかった
- 善根宿の実施にも、故人の命日を中心に選ばれることが多い



 **接待の心 一動機・目的一**

• 接待の返礼の御詠歌には、先祖供養の意義が明言されている

高祖弘法大師御茶供養の御和讃
たちよりて、お茶のくどくのあしやすめ
慈悲ある人のおなきに しばし憩の杖とめて
心こい茶のしたつづみ ふるさと遠く足曳の
旅のつかれもわすれけり 厚き恵みのおもてなし
このよのくどく のちのよのため



この中に、「慈悲ある人のおなしけに」、それから「厚き恵みのおもてなし」とあります。これは確かに前田先生が最初に言った、氣の毒にというか、慈悲・救済の純粹な気持ちだと思います。そして、この最後の一句は西国巡礼にも出でますけれども、いわゆる巡礼・遍路に必ず沿う言葉でございます。一つは「このよのくどく」、二つめは「のちのよのため」。これをどう読むか、昔から非常に議論がございます。もちろん、「このよのくどく」は、やはり巡礼や遍路に行って、そしてこの生きている、あるいは生かされている自分がやはり幸せになりたいと願うのは、人間として当然のことだと思います。それから、「のちのよのため」というのは、一つの解釈は、やはり命は限りあるものですから、亡くなるということは当然で、その後は阿弥陀さんによって救われるということを意図したと考えるものです。これは日本の宗教形態が平安の末ぐらいから、いわゆる現世と来世の二本柱を両方カバーする仏なり信仰を求めたということと無関係ではないと思います。ただもう一つの考えは、「のちのよのため」は、四国遍路にしろ西国巡礼にしろ、お参りする目的の一つに、亡くなった方のいわゆる菩提、追善がございます。やはり実際に宗教行為というものには、今生きている自分が悟りを開き、そして将来幸せになりたいというのが一つの願いとしてあるのは事実です。ただ、四国遍路の場合、ご承知のように四国という国自体が死の国という発想が昔からございます。お遍路さんの白装束というものはご覧のようにいわゆる死装束でございます。これは、修驗道でもそうですが擬死再生という、一度は死んでという形の宗教的な行為です。こうした日本的な発想で白を着るわけでございます。もっとも、明治・大正期の団体遍路は、もっと黒っぽい服装をしていたようです。

ここに来られたかどうか知りませんが、かつての同僚の佐藤久光氏が種智院大学にいる時に四国遍路のお参りをされている方にアンケートをとりました。なぜ皆さんは四国遍路をされるのかと。いろいろなお考えがあります。最近では、NHKさんの宣伝ではないですけれども、とにかく自分は何なんだということを考えるきっかけ、俗に言う自分探しということを最初に考えるという方もいらっしゃいます。同時に、亡くなった方の供養、回向のためとする方も多くいます。あまり私的な話をしても恐縮ですし、非常に感情的になるのですが、私は一人の人間としてあるいは宗教者として、最初皆さんを案内する時に、どちらかというとやっぱり現世の幸せということを考え、そして皆さんともお話します。しかし、8年間の闘病の末、家内を癌で亡くしました。もうあと何日もないという時にも、家内はお参りをしたいということで、車に乗せて何か寺かだけ來たこともございます。亡くなつてから後も、やはり故人というかそういう方の供養というか、その気持ちを強くもっておりまます。それは西国よりも四国の方がはるかに強いと思います。現に我々が団体を組んだ時にも、新規に入ってこられる方は約半数の方がここ2、3年の間に親しい方を亡くされています。それだけ宗教的なものというか聖なるものというか、そちらにより純粹な気持ちを抱いておられると考えられます。

もちろん、それだけではありません。四国遍路というのはいろいろな目的があって、それを受けて全てを受け入れができる大きな宗教文化システムと考えます。とくに、接待の心の中には追福祈願があります。たとえば、お返しする納め札に誰々さんの菩提と書くことがあります。結局その各札所札所の本尊さんとかお大師さんにお参りしましたということを挨拶するわけなのですが、その中にここにあります追福菩提というのが出てくるわけです。先ほどの御詠歌の最後の「のちのよのため」には、もちろん私が将来この世を去った時の後の世のためということもありますが、後の世に行かれた親しい方々の成仏、菩提を祈るということがあります。このことは、四国遍路ではやはりはずせないと思います。その証拠の一つに善根宿の実施があります。それは、大体亡くなった方との関係があります。先ほどの善通寺の方、学校の先生を退職された方ですが、やはり最初始められたのはご主人の御命日の日です。その日から始められたそうです。決して故なしとはいたしません。もちろん、それだけではありません。しかし、やはり接待の心の中に追福菩提の心があるということを申し上げておきたいと思います。

布施行と福田思想

いろいろな気持ち、我々と同じ本音の気持で、他人さんや見ず知らずの方に物を差し上げるということは、今の現代社会ではほとんどないでしょう。私がテレビの「心の時代」で申し上げました、人柄が変わったという方は、昔でいうと高利貸しといわれるお仕事で一代で財産を成した方でございます。非常に経済的にも人間的にもシビアな方でして、絶対損になることはしないと公言されていた方でした。ただ、あるいくつかの理由で、一度四国へ来られませんかとお説いた時に、原因は何かわかりませんし、何かのお導きかもしませんが、じゃあ一度行ってみようか、自分の知らない世界やあるいは知らない人びとがいるかもしれないね、と言

われました。もう80歳くらいになっておられ、奥さんが介添えで来られました。なかなか厳しい方で、旅費についてもちょっと高いんじゃないかなとまではつきりおっしゃった方です。ところが、四国に来て2日目、3日目に、道中で個人接待の方にお目にかかり、そしていきなりみかんを差し出していただいて、非常にびっくりされました。これは何だ、何か魂胆があるんじゃないかな、と。いやいやそうじゃないですよ、四国というところはいろんなお考えでお遍路さんにお接待を自分の意志でなされている方がたくさんいらっしゃる、そういう世界なんですよ、と答えました。へえ、そうか、最初はそうでした。ところが、接待がどんどん続きまして、最後の方は、先ほど相互接待という言葉がありましたら、私の連れてきている団体は強制はいたしませんが、実際お参りされている方の中でそれぞれ接待をされます。相互付与という言い方が仏教的には正しいのでしょうか。そういうことをなされるのを見て、いや物を貰うのは何か理由がないとだめだ、金を貸してそれを返してもらうのは当然だ、ところが貸していない人に返せとは言わない、おかしい、ということを1、2回言っておられました。いわゆる見返りを要求しない、これは社会学的にちょっと違うところもありますが、見返りがある場合もあります。しかし、そういうことがあります、そのように言われて、その方は段々と考え、顔つきが変わりました。法話でそういうふうに持っていくというわけではないのですが、帰られるころには本当に顔つきが変わられました。それから1年くらい経って往生されましたが、最後にまだ意識のあるころに、いいところへ連れて行っていただいた、人がいくらで説明してもわからない、清々しいお顔で見返りを要求しない接待、あるいは布施というものは、今までの自分の人生の中ではほとんどなかった、と言っていただきました。それを自慢話にするわけではありませんが、やはりそういう発想というか、お互いの、あるいは打算に基づいたものだけではない、そういう接待というものもあるのです。

接待の心 一動機・目的一

(4) 仏教という宗教行為の中心眼目の一つ
布施行、その対象としての福田思想

- 以上、接待の形と心を、主に作用と効果の面で、社会的な関係を視野に入れて考察してきた。
仏教学的立場からは、次の2点を無視できない

ア、布施行
イ、福田思想



ア、布施行としての接待

大乗仏教の6種の根本的実践行（六波羅蜜）の最初に掲げられる布施行は、相手やものに執われない施与行であるといわれている。ただ一つポイントがあるとすれば、「相手のために」という点であろう。その原則は大切であるが、すでに接待の動機や目的をいくつか列挙したように、現実の宗教行為、とくに社会的行為としては、様々な関係の中に「縁起」（因縁）的に接待も成り立っている。



最後に仏教学の立場から思想整理をいたします。今まででは接待のかたちと心というものを主に作用と効果の面でお話しでまいりました。厳密にはその中に社会的な関係を視野に入れないといけないことも事実でございます。一つは布施行です。先ほどありましたように皮肉たっぷりの『金草鞋』の中にも「せぎよう」ということがございました。これは、専門的に言いますと、何を差し上げるか、誰が差し上げるか、そして誰に差し上げるかということをあまり考えない、そういう価値判断の前に、差し上げること自体に意味を求める立場です。純粋供養といった方がいいでしょう。ただ、現実の問題では、社会の中ですからそれはいろいろと動機や目的があるということになりますが、そういう差し上げることの一番もとのオリジナルな清らかな意味が成り立っています。仏教的に言いますと縁起という言葉がございます。そこでその方にお会いして、その場で、これも場の縁と言えますが、そういうところで接待というものが行われます。やはりその場というのも非常に問題なのです。

もう一つは、福田思想です。これは少しギブアンドテイに近い発想になります。先ほど東南アジアの仏教では、人びとがお坊さんの食事を全部支えると申しました。それはどういう視点かといいますと、すでに昔から仏教の中では、奈良時代の行基、それから鎌倉時代の叡尊という方々は、いわゆる作善ということをおっしゃいました。これはその何かの行動・行為をする場合に、布施がその一つなのですが、それをさせていただくも

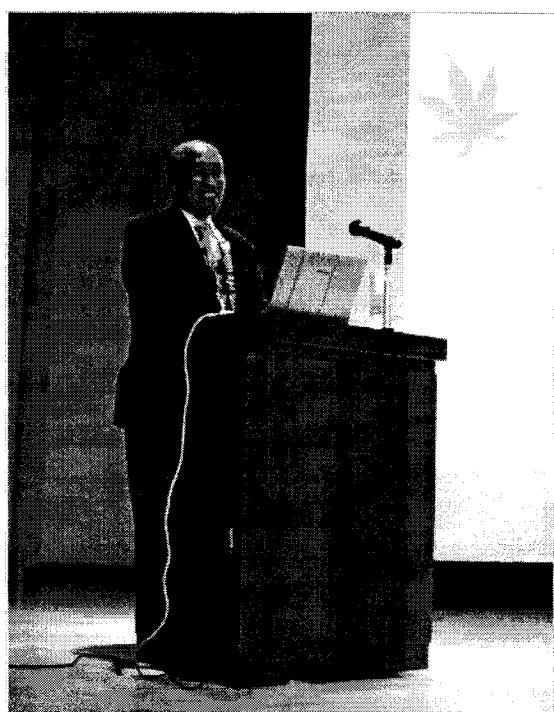
イ、福田思想に根ざす接待

すでに「作善」や「功德」などのポイントを述べてきたように、種々の様相を持つ接待の仏教学的基盤は、「福田思想」にあったと考えられる。福田とは、善き行為の種子を蒔いて、功德の収穫を得る田地という意味。これは仏教の社会福祉を示す言葉として流行した。四国遍路にあっては、弘法大師を背後にいただく遍路者は、まさに「生きた福田」であり、それ故に今も四国遍路という宗教文化の中に生き続けているのである。

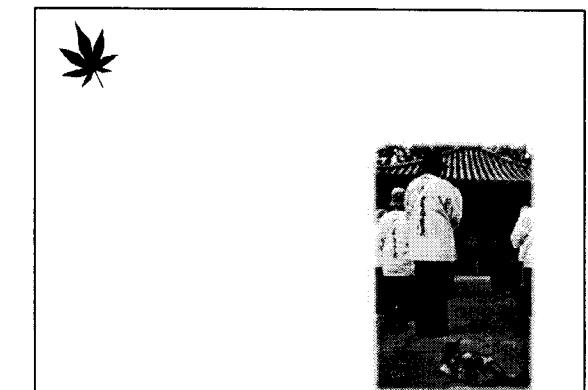


のです。相手に対して善をつませていただくというものです。先ほどのどこかにお参りするというのも一種の作善なのです。その作善ということは、その相手に対して差し上げることを前提にいたしますけれども、結果的には相手はそれに対して幸せあるいは功徳を生みだしてくれる田畠なのです。それを福田といいます。これは人の場合も同じです。お釈迦さんなども一種の福田です。お釈迦さんに物を差し上げるという場合、お釈迦さんに純粋に供養するということと同時に、あちらから何かを授けて下さると考えます。それを期待するのは、ギブアンドテイクのテイクの方を意識した場合でございます。そこで仏教では特に福祉関係にこの言葉がよく使われます。

四国遍路にあっては遍路者は弘法大師を背後にいただいている。何度も申しましたように接待は西国に比べて四国の方に長く残ります。それはやはり、物を差し上げる、接待することに、むしろお大師さんに差し上げているという感じが非常に強いわけでございます。そういう意味では、福田の一つの究極的な境地というものが、いわゆる遍路の方に接待することにあると考えることもできます。これは先ほど言いましたように少しギブアンドテイクが入ります。しかし、それは人間の幸せを求める考えの中に当然あることでございます。さきほど、お金を貸し借りする人が、何か裏があるのではないかと考えたと言いましたが、そういう意味での金銭的なものや物品的なものではありません。そうさせていただいた、これが一つの決め手であるわけです。もちろん、接待の捉え方というのはこういうきれいごとで済まないケースが多くあります。先ほど申しましたように、乞食に対応する接待という見方もあるわけです。何度も申しますように、お大師さんを通してのいわゆる接待ということになりますと、それは聖なるものと我々との巡り合いという一つの大きな縁として考えられますので、接待もそれほど抵抗のないものになるのではないかと思います。何度も申しますように、四国遍路の中にはそれは自然に入っているのです。最後はやや綺麗ごとでまとめましたが、一応これで私の講演は終わらせいただきたいと思います。どうも長時間ご清聴ありがとうございました。



賴富本宏氏講演



講演会風景

